「君が代」考

溝口貞彦

一　「さゞれ石の巌となりて」について

1　問題の所在

(1)　一つの疑問

「君が代」について、たまたま次のような一文を目にした。

「細石（さざれ）を小さな石とし、巌を巨岩とするとき、小さな石が大きな岩にどうして生成・発展するのか…。その疑問は私一人ではなかったはずである。同輩や知人・友人と「君が代」を議論するとき、同じ疑問がよく出されていた。[1]」

たしかに、「岩が崩れて小石になるというのならわかるが、さざれ石が岩になるということはないのではないか。なぜ〝さざれ石の巌となりて〟といわれているのか」というのは、多くの人が抱く、素朴な、しかし基本的な疑問である。これはどのように解すればよいのだろうか。

本稿は直接には、この問いかけ――「なぜ、さゞれ石が巌となる、といわれているのか」に答えようとして起稿したものである。しかし「君が代」の歌について調べているうちに、「君が代」のような、長寿・永生を祈る歌には、二種の系列のあることがわかった。一つは、現世における長寿を祝う賀歌の系列である。もう一つは、死後の、来世における永生を祈る挽歌の系列である。「千代に八千代に」と祈る「君が代」の歌は、そのどちらの系列に属するものであるか、ということも、あわせて検討することとした。

(2) 元歌とその解釈

「君が代」の歌の元歌は、『古今集』巻七の、「読み人しらず」

我君は　千世に八千世に　さざれ石の
巌となりて　苔のむすまで

である。

山田孝雄は古今集の種々な伝本を調べ、この「我君は」の歌が、右の形のほか、次のようなさまざまな形で伝えられていたことを明らかにした。

「我君は　千世にましませ　さゝれ石の
いはほとなりて　こけのむすまで」

「我君は　千世にましませ　さゝれ石の
いはほとなりて　こけむすまでに」

など。(2)

そしてこれが、平安末、藤原公任撰『和漢朗詠集』に、

君が代は　千代に八千代に　さざれ石の
巌となりて　苔のむすまで

として採録され、その後は「君が代は」の形で世に知られるようになった。

では、元歌に即して、従来これがどのように解釈されてきたか、代表的な事例をみてみることにしよう。

戦前にすぐれた解説書を残した金子元臣は次のように述べている。

「私の頼み奉る君は、千年も万年もお繁昌で、お出で遊ばされて下されませ。いやそれではまだ飽かぬ。あの小さな石が大きな巌となって、またそれに苔の生えるまでお出なされませ」[3]（『古今和歌集通解』）

この部分の解説は表面的で、もの足りないが、「我君」について、「君は二人称の代名詞で、天子の事ではない」と注釈しているのは、参考になる。もともとは、身近な長者など、種々な人を指し、多義的に使われていたのが、明治以後一義的に、天皇を指して使われるようになったのであろう。

歌人として有名な窪田空穂は、次のように説いている。

「わが君は、千年に、八千年にましませ。さざれ石が巌と化して、その巌に苔の生えるまでに」[4]（『古今和歌集評釈』）

ここでは「さざれ石が巌と化す」と述べられている。（どうやってさざれ石が巌に「化す」のだろうか）。

国文学者松田武夫は、次のように解釈している。

「わが君は、千代までも八千代までも栄えておいでになりますように。小さな石が成長して巌となり、苔が生えるまで」[5]（『新釈古今和歌集』）

ここでは「小さな石が成長して巌とな」ると述べられている。（本当に小石が「成長して」巌となるのだろうか）。

小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』は次のように解釈している。

「わが君は、永遠の世々に、小さな石が大きな岩と成って苔が生い茂るさきざきまで長く、おすこやかにあらせられませ」[6]（「小さな石が大きな岩と成」るのは、なぜ、どうしてなのかは、やはり説明されていない。小島は『万葉集』などですぐれた注釈を書いているので期待して読んだが、今回は期待はずれであった）。

これらは「さざれ石の巌となりて」という歌詩を、表面的になぞっているだけである。多くの人が抱いている「なぜ、さざれ石が巌となるのか」という疑問には、とうてい答えるものではない。そもそも右のような、字面だけの説明が、「解釈」とか「評釈」の名に値するのであろうか。

竹岡正夫の『古今和歌集全註釈』は、古今集の各歌について、古来の種々な註釈を集成した労作である。その点は評価しなければならないが、竹岡自身の解釈は、先の窪田や松田等の解釈と五十歩百歩である。

「わが君は、千世に、八千世に、――小石が巌となって苔の生いむすまで」

これだけで「註釈」というには気がひけたのか、次のようにつけ加えている。

「小石がだんだん、だんだん大きくなって大きな石になり、もっと大きくなっていわおとなり、そのうえに苔がだんだん、だんだん生えていって、とうとう全部苔が生いむすまでに」[7]

説明はていねいになっているが、やはり肝心の疑問には答えていない。

巌が崩れて大石となり、さらに大石が崩れて小石となる、というのであれば、ごくふつうにみられる自然現象である。竹岡は逆に「小石がだんだん、だんだん大きくなって大きな石になり、もっと大きくなっていわおとな」る、というが、そのようなことがありうるのか、ありうるとすればなぜか（どんな場合か）ということが問題である。すなわち「なぜ、さゞれ石が巌となるか」という問題である。竹岡は「だんだん」をくり返し、多弁を弄しているが、やはりその問題には答えていない。

従来の解釈は（国文学の大家といえども）表明的な説明に終始し、多くの人が抱く疑問に一歩ふみこんで答えようという姿勢がみられない。

最初に提起された疑問――「なぜ、さざれ石が巌となるといわれているのか」――は、依然そのまま残されている。

2　平安人の考え方

(1)　『古今集』の序から

「君が代」の元歌である「我君は」の歌は、『古今集』の序で再三とりあげられ、言及されている。そこにこの問題解決の糸口があるように思われる。

まず、『古今集』仮名序と真名序の関係する部分をとりあげてみよう。

①仮名序から

「さゞれ石にたとへ、つくば山にかけて君をねがひ、…うたをいひてぞ、なぐさめける」

「此たびあつめえらばれて、山下水のたへず、浜のまさごの数おほくつもりぬれば、今はあすか川の瀬となるうらみも聞えず、さゞれ石のいはほとなるよろこびのみぞあるべき」

また、次のように述べているのも、この歌に関係があると思われる。

「遠き処も出で立つ足もとよりはじまりて年月をわたり、高き山も麓の塵ひじよりなりて、天雲たなびくまで生ひのぼれる如くに、この歌もかくの如くなるべし。」

②真名序から

「砂長為巌之頌、洋洋満耳」（砂長ジテ巌ト為ルノ頌、洋々トシテ耳ニ満ツ）

ここでの一つの問題は、「はまのまさご（真砂）のかずおほくつもりぬれば」や「砂長ジテ巌ト為ル」ということばに出

てくる「砂」（ないし「真砂」）と、「さざれ石」との関係である。それについては、古くから、この歌にいう「さざれ石」は「砂」をさすという解釈が出されていた。

藤原顕昭『顕註密勘』は、「さざれ石とは沙也、すなごともいひ、いさごともいふ」としていた。

そうだとすれば、「さざれ石の巌となりて」ということばは、真名序の「砂長ジテ巌ト為ル」というのと、同じ意味になる。そしてそれはすでに寂恵によって指摘されていたことである。「サヽレイシトハ砂也、スナゴトイヒ、イサゴトモイフ、砂長為巌トイフ也」（『古今集勘物・書入』[8]）

「砂長ジテ巌ト為ル」というのは、仮名序にあるように、「はまのまさごのかずおほくつも」るという、堆積ないし集積の意味に解さなければならないであろう。砂が堆積して巌となるというのである。

それと同様、「さざれ石の巌となりて」というのも、さざれ石が成長して巌となるという意味ではなく、さざれ石が「かずおほくつも」って、うず高くつみ重ねられ、巌となるという意味と考えられるのである。

紀貫之が「古今集」序で、再三「我君は」の歌詞を引用した意図は、ほゞ明らかである。彼は、「此たびあつめえらばれて、…さゞれいしのいはほとなるよろこびのみぞあるべき」と述べている。彼は個々のすぐれた歌を「さゞれ石」に例えている。そして秀歌を数多く集め、『古今和歌集』編纂という歴史的事業をなしとげたことを、「さゞれ石のいはほとなるよろこび」と、感慨をこめて語っているのである。

貫之のこのようなとらえ方からしても、「さゞれ石の巌となりて」ということばは、「塵も積れば山となる」と同じく、小なるものが累積して巨大なものが形成されることを表しているといえる。

(2) 『梁塵秘抄』から

平安末期に作られた、後白河天皇撰『梁塵秘抄』は、「君が代」の歌に関心を寄せ、その類歌を多く載せている。それを

みると、古今集が作られて間もない時、平安人(びと)がこの歌をどのように解していたかがわかってくる。

『梁塵秘抄』の最初に出てくる歌は、

そよ、君が代は　千代に一度(ひとたび)ゐる塵の
白雲かかる　山となるまで

である。

『梁塵秘抄』は、「塵」を尊ぶ姿勢から、このような題をつけ、またこの歌を最初にもってきたといわれる。(いうところの「塵」は、もちろん塵芥ではなく、世界を成り立たせている原初的なものをさしている)。

この歌も「君が代」の歌の類歌の一つであるが、「君が代は千代に八千代に」というのをいいかえて、「千代(千年)に一度の塵が積って、白雲のかかる高山となるまで」と述べている。「塵も積もれば山となる」をスケールを大きくいいかえているが、基本的には「君が代」の歌と「塵も積もれば…」の諺とを結合したものである。

また、『梁塵秘抄』には、次のような類歌も載せられている。

砂(いさご)の真砂(まさご)の　半天の
巌とならむ世まで　君はおはしませ　(二一―三二二)[9]

この歌は、仮名序の「はまのまさごのかずおほくつもりぬれば」ということばと、真名序の「砂長ジテ巌ト為ル」ということばをもとに作られた歌と思われる。その巌は「半天の巌」、すなわち中空に高く聳える巌であり、ふつうの山よりはるかに高い山としてとらえられている。

これらは、「さざれ石の巌となりて」の語が、「砂長ジテ巌ト為ル」と同じ意味であり、また「塵も積れば山となる」という諺と同じ意味であることを示している。すなわち微小なものを多数集め、積み重ねて、巨大なものをつくるという思

想を表現したものである。

私たちは先に、現代の歌人や国文学者が、「さざれ石の巌となりて」というのを、「小石がだんだん大きくなる」とか、「小石が成長して巌となる」と解釈しているのをみた。それらは子どもが大人（おとな）となるように、一つの小石が成長して大きくなり、一つの巌となるとみていたのである。それは小石成長論というべきものであった。

しかし『古今集』序や『梁塵秘抄』では、それとはとらえ方が異っている。

すなわち「塵も積れば山となる」ことと結びつけて、「かずおほくつも」ることととらえている。それは成長論に対し、集積論ないし堆積論というべきものである。

成長論が、小石対巌の関係を一対一とみているのに対し、堆積論は多対一とみているところが異なる。

成長論は、なぜさゞれ石が成長するか（大きくなるか）の根拠を示さない。それは立論として誤りといわなければならない。それに対して堆積論は、「塵も積れば山となる」のと同じく、無数の小なるもの（砂またはさゞれ石）が堆積して、一つの大なるもの（巌）が形成されると説いている。自然現象としてではなく、小から大が形成される意味、すなわち多数（無数）の小なるものの集合によって、大なるものが形成されるという思想を説いている。それは平安時代の人たちが考えていた本来の意味づけであるということができる。

3　歌詩の思想的背景

(1)　古代中国の「土を積む」という思想

「さざれ石の巌となりて」といういいまわしは、『古今集』においてはじめて現れた、漸新な表現である。そしてそれは、旧来の「塵も積れば山となる」という諺と、同じ意味内容であると考えられる。

そこでこの諺を引用した『古今集』序の、次の一節が注目される。

「遠き処も出で立つ足もとよりはじまりて年月をわたり、高き山も麓の塵ひじ（泥）よりなりて、天雲たなびくまで生ひのぼれる如くに、この歌もかくの如くなるべし。」

これは、白楽天が座右の銘とした、次の詩のことばにもとづくものである。

千里始足下　高山起微塵
吾道亦如此　行之貴日新

平安時代の歌壇が『白氏文集』の強い影響下にあったことは広く知られており、『古今集』序のことばが、白楽天の右の詩をもとに書かれたことは、まず疑いのないところである。

この詩のはじめ二行に出てくる、「千里ハ足下ヨリ始マル」というのと、「高山ハ微塵ヨリ起ル」というのは、同じ意味（または思想）を述べたものである。そして日本では、「千里の道も一歩から」と「塵も積れば山となる」という二つの格言となって流布し、広く人口に膾炙せられた。

しかし、「千里ハ足下ヨリ始マル」というのは、古代中国の諺にもとづくものであり、「高山ハ微塵ヨリ起ル」というのは、仏教の格言から出たことばであって、この二つは思想的系譜を異にしている。まず前者から検討していくことにしよう。

ここで白楽天や貫之の時代から千年余を逆のぼり、春秋時代末期にいたらなければならない。「千里ハ足下ヨリ始マル」というのは、『老子』守微第六十四にいう、次のことばに由来するものだからである。

合抱之木、生於毫末、九層之台、起於累土、千里之行、始於足下。(10)

（合抱の木も、毫末より生じ、九層の台（うてな）も累土より起り、千里の行も、足下より始まる）

これは、（「塵も積れば山となる」という格言と同じく）大なるものも微小なるものが集積されて構成されるということ

をいい表している。

『荘子』雑篇則陽第二十五では、老子の「九層の台は累土より起る」を受け、それを少しいいかえて、次のように述べている。

「是故丘山積卑而為高。江河合水而為大。大人合併而為公」（是の故に丘山は卑きを積みて高きを為し、江河は水を合して大を為す。大人は合併して公を為す）[11]。

さらに前漢の劉向は『説苑』建本第三で、これを受けて「土積りて山と成る」と述べた（「水積成川、則蛟竜生焉。土積成山、則予樟生焉。学積成聖、則富貴尊顕至焉」）[12]。

その後「土積成山」（土積りて山と成る）のことばは、四字成語として広まった。それはこつこつと学問に励めば、やがては「富貴尊顕」の人となるという、古代中国の蛍雪思想を比喩的に表現するものであった（その思想は、江戸時代の『実語教』や、福沢諭吉の『学問ノススメ』等に受けつがれている）。

古代中国で、「九層の台は累土より起る」（老子）→「丘山は卑きを積みて高きを為す」（荘子）といわれてきたことがもとになり、「土積りて山と成る」（説苑）という成語がつくり出された。それらが下地となって、次にのべる「微塵を積みて山と成す」という新しい格言が形成されたということができる。

(2) 仏教思想――「微塵を積みて山と成す」という考え

中国で最も早い時期に出て、その後よく引用されるようになった仏教経典の註釈書は、鳩摩羅汁の『大智度論』（四〇五年）である。これは三世紀インドの仏教学者竜樹（ナーガールジュナ）が著した仏教の各種経典の註釈書を漢訳したものである。その第九十四巻の一節に、「受此業果報、則難可得度。譬如積微塵、成山難可得移動」とある[13]。

「微塵」は、目に見えないようなごく小さい塵という意味であるが、仏教哲学では、種々な物質を構成する、基本的な、

原子のごとき存在と考えられている。「微塵を積みて山と成す」というのは、その後一つの格言として使われるようになった。中国で古くからいい伝えられてきた「土積りて山と成る」等の格言をもとに、鳩摩羅汁が「微塵を積みて山と成す」の名句をうち出したことは明らかである。

そしてこの名句は日本に伝えられて「塵も積もれば山となる」の諺となり、いろはカルタ等に用いられ、多くの人々に長く愛唱されてきた。

(3) 仏教の「砂を積む」という考え

「微塵を積みて山となす」と規を一にするものであるが、仏教には「砂を積みて仏塔と為す」という格言もある。(それは『梁塵秘抄』にも、「いにしへ童子の戯れに、砂(いさご)を塔となしけるも、仏と成ると説く経を、皆人持(たも)ちて縁結べ」と歌われている)。

この格言は、『法華経』方便品で、次のような文脈の中で述べられている。

或有起名廟　栴檀及沈水
木槿並余材　甎瓦泥土等
若於曠野中　積土成佛廟
乃至童子戯　聚沙為佛塔
如是諸人等　皆已成佛道

(誰かが大理石・栴檀あるいは沈香の塔を建立するとき、……
子どもが遊戯の際に、そこここに、小石づくりの塚を作り、仏たちのために供養塔とするとき、
これらの人々は、すべて「さとり」に到達するであろう)[14]。

ここに出てくる「沙ヲ聚メテ仏塔ト為ス」ということばがもとになって、仮名序の「はまのまさごのかずおほくつもりぬれば」ということばが導き出されたし、また真名序の「砂長ジテ巌ト為ル」ということばが導かれたと考えられる。

これらの思想的背景を整理し、次のように図式化して表わすことができる。

「さゞれ石の巌となりて」の思想的背景

「九層の台も累土より起り、千里の行も足下より始まる」（老子）

←

「土積りて山と成る」（説苑）

←

「微塵を積みて山と成す」（大智度論）

←

「千里ハ足下ヨリ始マリ　高山ハ微塵ヨリ起ル」（白居易）

←

「…高き山も麓の塵ひじよりなりて」（仮名序）

「沙ヲ聚メテ仏塔ト為ス」（法華経）

←

「砂長ジテ巌ト為ル」（真名序）

←

「はまのまさごのかずおほくつもりぬれば…
さゞれいしの　いはほとなるよろこび」
（仮名序）

「さゞれ石の巌となりて」

「さゞれ石の巌となりて」というのは、端的にいえば、「微塵を積みて山と成す」という格言を歌語に置き換えて、いいかえたものである。すなわち、「さゞれ石の巌となりて」というのは、「塵も積もりて山となる」をいいかえたもの、というのが、本論の一つの結論である。

「微塵を積みて山と成す」すなわち「塵も積れば山となる」というのは、微小なものを累積して巨大なものを形成すると

いう哲学思想を表している。これを時間にあてはめれば、眼前の一分一秒が累積して、千年にも万年にもなるのである。「千代に八千代に」という抽象的なことばを、「さゞれ石の巌となりて」という具体的なことばに置き換えているのであるが、それは単なる置き換えに止まらない。それは背後の「土積りて山と成る」や「微塵を積みて山と成す」という東洋的哲学思想に裏づけられているのであり、奥行きのある表現になっているのである。

二　この歌の基本的性格

1　挽歌と賀歌

「君が代」の歌は、長寿・永生を祈る歌である。長寿・永生を祈る歌は、万葉集以来の長い歴史があるが、その中でも最も早いのは、天智天皇の皇后であった倭姫の作になる次の歌であると思われる。

天の原　ふりさけみれば　大君の
御寿（みいのち）は長く　天足らしたり

（大空を遠くふり仰ぎますと、天皇の御寿命は悠久に、大空一杯に満ちています）

この歌に関して、ある高校の国語教師から直接聞いたことをつけ加える。この歌を黒板に書いて示したところ、ある生徒はすぐに、これは「君が代」に似ているといったという。そこでこれを賀歌と思うか、挽歌だと思うかと聞いたところ、大部分の生徒は長寿を祝う賀歌としたという。

しかしこれは、万葉集巻二の「挽歌」のうちに収められており、「天皇聖躬不予之時、太后奉御歌」（天智天皇が危篤の時、皇后が作られた歌）という題詞がついている。これがどんな時に作られたかという背景を知らなかったら、高校生でなくとも、多くの人は賀歌と錯覚するかもしれない。

大伴家持が「臥病悲無常」「願寿作歌」に

水泡なす　仮れる身そとは　知れれども
なほし願ひつ　千年の命を　（二十―四四七〇）

とある。現実には水の泡（うたかた）のようなはかない命であるからこそ、自ら重病に陥ったとき、また親しい人の死に際したとき、永生の願いが強く表れる。

そこで挽歌において、しばしば「千歳に」とか「萬代に」ということばが歌いこまれている。

高光る　我が日の皇子の　萬代に
国しらさまし　島の宮はも　（二―一七一）

（日並皇子を悼む「舎人等慟傷作歌廿三首」より）などである。

万葉集では、前期・中期には挽歌が大きな比重を占めているが、賀歌が登場してくるのは、万葉末期（奈良時代後半）になってからである。多くの賀歌においても、千年も万年もという長寿・永生の願いが歌いこまれている。

家持が左大臣橘諸兄家の宴で歌った次の歌は、その一例である。

青柳の　上枝攀ぢ取り　かずらくは
君が宿にし　千年寿ぐとぞ　（一九―四二八九）

（青柳の梢を折り取り縵にするのは、お邸であなたの千代を祝う気持からです）

など（六―一〇二四も同例）。

そこで長寿・永生祈願の歌には、現世における長寿を願う賀歌の系列と、死後の来世における永世を祈る挽歌の系列との、二つの流れが生じている。では、「君が代」の歌は、どちらの系列に属するであろうか。

ここで注意すべきは、賀歌には時におどけたことばなどを交え、華やいだ雰囲気をかもし出しているものが多いことである。例えば、家持の「為応詔儲作歌」では、

豊の宴（あかり）　見（め）す今日の日は……
島山に　赤る橘　うずに刺し
紐解き放（さ）けて　千年寿（ほ）き　寿きとよもし
ゑらゑらに　仕へ奉（まつ）るを　見るが貴（たふと）さ　（一九―四二六六）

と歌われている。「ゑらゑらに」の「エラエラは上機嫌に笑いさざめく声の擬声語」[15]であるが、宴たけなわとなり、衣の紐を解き、くつろいで酒をくみ交す情景と笑い声が聞こえてくるような歌である。

挽歌には、悲しさ・淋しさを吐露したものと、倭姫のように感情を抑制した歌がある。「君が代」は右の賀歌のような華やいだ雰囲気はなく、厳粛かついささか一本調子で、その内容は倭姫の歌に近く、雰囲気は感情を抑えた挽歌に近い。ではそれは挽歌といい切れるかどうか、しばらくその用語を調べていくことにしよう。

2　用語の検討

「さゞれ石の巌となりて」というのは、「塵も積れば山となる」と同じ意味内容を、歌語を用い、詩的に表現したものと考えられる。

周知のように、古歌はそれに先だつ古い歌の中から、用語やいいまわしを継承し、作られることが多い。そこでこの歌の用語（「さゞれ石」・「巌」など）を、どこから採ったかということが一つの問題となる。

「我君は」の歌が「読み人しらず」となっていることは（この歌は『平家物語』に出てくる平忠度の歌のような劇的な物語を伴っていないので、故意に作者名を伏せたということではなく）、貫之の時代にはすでに年ふり、作者も制作事情もわ

からなくなっていたからだと推測される。

この歌が五七調で詠まれていることは、まだ万葉集の影響の強い時代（奈良時代末か平安時代初）の作であると考えられる。そこで、この歌に影響を与えた歌としては、古今集の他の歌よりも、万葉集の歌が想定されるべきであろう。

(1) 「巌」の意味——死の象徴

「我君は」（ないし「君が代」）の歌のキーワードとなるのは、「巌」の語であると考えられる。そして「巌」は、万葉集においては、「墓地」ないし「墓所」をさして使われている。

例えば、「石田王卒之時、丹生王作歌」では、石田王を「泊瀬の山」（墓地として名高い）に葬ったことを長歌で歌ったのち、次の反歌がつけられている。

逆言（およずれ）の　狂言（たはごと）とかも　高山の
巌の上に　君が臥（こや）せる（三—四二一）

「高山の巌」であなたが永い眠りについているというのは、「逆言の狂言」（ありもしないことをいう悪い噂）にすぎないのではないかと、我が子の死が信じられず、嘆いている母の心を歌ったものである。ここで「巌」が墓所をさしていることは、いうまでもない。

「巌」の語は、死者を入れた石棺を、墳の内部の石室に収めた後、墳の入口を大きな岩でふさいだことにもとづいている。その岩は「巌」または「岩戸」といわれた。万葉集や古事記では、「岩戸」の語の方が使われることが多い。

例えば、「河内王葬豊前国鏡山之時、手持女王（たもちのひめぎみ）作歌」では、

豊国の　鏡の山の　岩戸立て
篭りにけらし　待てど来まさず（三—四一八）

とある。

「巌」ないし「岩戸」は、この世（現世）とあの世（冥界）との境界を示す象徴であり、黄泉の国から逃げ帰った伊耶那岐が、岩戸を立てて冥界の追手をさえぎるなど、幾多の物語を生んでいる。

各地に「巌」や「岩戸」に関する伝説が残されているが、その一例として、『出雲国風土記』の出雲郡宇賀郷の条に出てくる「磯」（大巌石）の記述をあげることができる。

北の海浜に磯あり。なづき（脳）の磯と名づく。高さ一丈許なり。上に松生ひ、芸りて磯に至る。…磯より西の方に窟戸あり、高さと広さと各六尺許なり。窟の内に穴あり。人入ることを得ず。深き浅きを知らざるなり。夢に此の磯の窟の辺に至れば、必ず死ぬ。故に俗人古より今に至るまで、黄泉の坂、黄泉の穴と号く。(16)

「巌」は死の象徴であり、墓所をいみし、黄泉の国への入口をいみするものであった。

(2) 「さゞれ石」の意味

「さゞれ石」は「細石」の字が当てられる。

『和名類聚抄』は、「細石」について、「佐々良石」ともいう。「小石之儀」、「水中細石也」としている。(17)

「さゞれ石」については、万葉集の「信濃国歌」にその用例がある。

信濃なる　筑摩（千曲）の川の　細石も
君し踏みてば　玉と拾はむ　（十四―三四〇〇）

「さざれ石」は「ささら石」ともいうが、「さざれ」および「ささら」の語は、いかにも古代万葉的かつ幻想的な用語である。

その語源について、次のような説がある。

「ささら」の方がより古い語であり、それが転じて「さざれ」の語が生じた。「ささら」は、語幹「ささ」に接尾語「ら」がついたものである（「ら」は岩羅の羅である）。

語幹の「ささ」は、「狭し」の語幹「さ」を重ねて、「ささ（狭々）」としたものである（山本襄太『国語語源辞典』校倉書房）。

ここでは深入りはできないが、「ささら」の語源については、このほかにも「砂」を重ねて「ささ（砂々）」とし、助詞「ら」をつけ加えた等、諸説がある。

しかし、これらの説には、なお不十分なものを感じる。それは「ささら」や「さざれ」の語がもつ幻想性・神秘性をなお十分反映していないからである。

思うに、「ささ」というのは、微風が野原を通りすぎるときの、サーサーいう音の擬音語であり、葉をゆるがす音から「小竹葉」を「笹」というようになったと考えられる。

古代人は、微風の通過とともに、神の通りすぎるのを感じたのである。そこで風が水上を通過してさざ波をたてるとき、そこに神の足音をみたのである。「さざ波」は「さざれ波」（または「ささら波」）を略したことばであるが、万葉集では神と関連づけて、「神楽浪」（七―一二五二）または「神楽声浪」（七―一三九八）と表記している。

「ささ」は神と関連することばである。万葉集で「ささら愛男」や「ささらの野」という語が出てくる。これを多くの解説書は、「可愛らしい小さい男の子、月の別称」、「天にある小野」と説明している。それは「神の愛する男の子＝月」、「神が遊ぶ野」とした方が、より明確になるのではなかろうか。

そして「さゞれ石」の意味であるが、それは単に河原にあるときと、「巌」との関連に置かれたときとでは、意味が異なる。例えば、「笹」が野にあるときと、神楽の舞台にあって、「採物」として人長（舞踊の主役）の手にあるときとで意味

が異なるのと同様である（採物というのは、神の下るところであり、神はまず採物の笹に下り、次にそれを持つ人に憑依するのである）。

この歌の「さざれ石」と「巌」は、霊石としてとらえられるべきであろう。霊石というのは、内に霊が込められているとして、崇拝の対象となる石である。例えば、万葉集（五―八一三）にも、「筑前国子負の原に、海に臨む丘の上に、二つの石あり。…皆楕円、状鶏子の如し。その美好なること、勝げて論ずべからず」として、「神ながら　神さびいます奇しみ魂　今の現に　尊きろかむ」と歌われている。

霊石の考えは、長く沖縄において継承された。琉球の宗教について調査した折口信夫は「琉球神道では、石に神性を感じることが深く、生き物の石に化した神体が沢山ある。」「一般に、霊石をびじゅるといふ。…道の島では、霊石にいびがなし（神様）という風な敬称を与へてゐる処もある」と述べている。[18]（「びじゅる」（または「びんずる」）と呼ばれる霊石への信仰は、今日まで続いている）。[19]

「さざれ石の巌となりて」というとき、それは個々の霊石としてのさざれ石が集積され、巌という霊石の集合体を形成することを意味しているのである。

(3) 「苔生す」――再生の象徴

現在は、「苔生す」とか「苔がはえる」ということは、進歩のないことをいみし、忌むべきこととされている。しかし古いものを尊んだ古代においては、「苔」は好感をもって見られ、「苔生す」ことは尊いこととされた。

弓削皇子が「吉野より蘿生せる松が枝を折り取り遣せる時」、それに応えて額田王が、「み吉野の玉松が枝は愛きかも」（二―一一三）と歌っているのは、そのことを示している。

岩に苔むすのを歌い、「君が代」の歌の雰囲気と類似したものに、次の歌がある。

奥山の　岩に蘿生し　畏けれど
思ふ心を　如何にかもせむ　（六―一三三四）

これは「畏けれど」ということばを導くための序詞として、「奥山の岩に蘿生し」と述べられている。しかしここで、人跡到らぬ奥山という場面設定をし、「岩に蘿生す」さまを「畏けれど」として、神を拝む気持をうち出しているのである。「君が代」の歌の、「さざれ石の巌となりて、苔の生すまで」の部分において、私たちは「巌」の語によって、死と死後の世界へと導かれる。そして「苔の生す」の語によって再生へと導かれるのである。ここで「巌」は墓石と同じく、内に霊魂の篭る岩、すなわち霊岩というべきものである。内なる霊が、「苔」という生物となり、外に発現しているのである。

万葉集では、挽歌によく種々な植物がよみこまれている。それはつつじや松、また撫子や荻、蔦や藻（水藻）などである。それは死者の霊前に供える供花であり、また死者の形身、身代りであり、形をかえた再生の意味をもつものである。

大伴家持が妻を亡くし、「見砌上瞿麦花作歌」にいう。

秋さらば　見つつ偲べと　妹が植ゑし
やどの石竹　咲きにけるかも　（三―四六四）

ここに出ている石竹が、亡き人の形身ないし身代りと受けとめられ、歌われていることは明らかである。

また、日並皇子を悼む舎人の歌にいう。

水伝ふ　磯の浦廻の　岩つつじ
茂く開く道を　また見なむかも　（二―一八五）

この岩の間に生えるつつじが、死者の形身ないし身代りとされていることも、また明らかであろう。

「君が代」の歌における「苔」は、それら植物の延長線上にある。ここで「苔の生すまで」は再生思想を表現するもので

ある。死と再生というのは、挽歌特有のテーマであるが、「さざれ石の巌となりて、苔の生すまで」の語句において、死と再生が歌いこまれているのである。

本論は「君が代」＝挽歌説をとる。それを疑う人のために、さらに次のことをつけ加えよう。ある歌が賀歌か挽歌かまぎらわしいとき、それをみきわめる有力な方法の一つは、その本歌がいかなる歌であったかをみることである。新古今集では、「本歌どり」ということがいわれる。しかし古歌は、それに先行する歌を本歌とし、その一部の語句をとり入れて作られるのがふつうである。だから新古今に限らず、多くの古歌は「本歌どり」であるといえる。その本歌が賀歌であれば、それにもとづいて作られる歌も賀歌であり、その本歌が挽歌であれば、それにもとづいて作られる歌も、ふつうは挽歌であるといえる。

「我君は」の歌が本歌として想定していたのは、万葉集巻二の挽歌の一つ、「和銅四年歳次辛亥河辺宮人姫嶋松原見嬢子屍悲嘆作歌」であったと考えられる。

妹が名は　千代に流れむ　姫嶋の
子松が末に　蘿生すまでに　（二―二二八）

この歌の「千代に」と「蘿生すまでに」の語句が、「我君は」の歌にとり入れられている。この歌に出てくる乙女は、水死―おそらく自殺したものであり、これは浮ばれぬ死者の霊に対する鎮魂の歌である。

この歌によみこまれている「子松」は、死者の再生の姿の表現である。それは形を変えた再生であり、「転生」という方がさらに正確であろう。すなわち小松が成長して大木となり、さらに老樹となって、そこに苔生すサイクルのうちに、現実には果せなかった乙女の長寿・永生の姿をみようとしている。（なお「蘿生すまでに」の原文は「蘿生萬代尓」であり、ここにも「萬代」までという永生の願いがこめられている）。

「我君は」（「君が代」）の歌は、水死した乙女を悼む挽歌を本歌として作られたものであり、それが挽歌の系列に属することは明らかである。

3　蓬莱山思想との結びつき

『梁塵秘抄』では、「君が代」の歌と関連して、「塵もつもれば山となる」の諺が歌いこまれ、また「砂（いさご）の…半天の巌とならむ」と歌われているのを先にみた。実はそれらの山（ないし巌）は、この世のものでなく、霊界のものであり、「蓬莱山」をさすことが、他の歌で示されている。例えば、

如何なる塵の　積もりてか
蓬莱山と　高からん

などである。（そのほか『梁塵秘抄』には、蓬莱山を歌った歌が数首ある）。

蓬莱山の考えは、古代中国の伝説に発するものであり、前漢代の作とされる『山海経』に、次のように書かれている。

「蓬莱山は海中に在り、上に仙人の宮室有り、皆金を以て之を為る。鳥獣尽（ことごと）く白く、之を望めば雲の如し。渤海中に在るなり。」

蓬莱山は仙人の住む永世の島であり、日本にもなじみ深い徐福（徐市（じょふつ））伝説と結びついている。[20]

蓬莱山は、古来中国で、不老不死の島にあるといい伝えられてきた。そして仏教伝来後は、仏教でいう須弥山（シュミセン）と同一視されるようになった。[21]（蓬莱山も須弥山も、大海中に聳える高山として説かれており、イメージが重なる。『梁塵秘抄』では、蓬莱山を背負うという伝説の亀（万劫亀）を通して、蓬莱山と須弥山とが結びつけられている）

不老不死の島にあるという蓬莱山は、日本古代の（万葉集や記紀に出てくる）「常世（とこよ）」に相当するものである（火遠理命や浦島太郎が訪れた海底の国が常世とされる。また『日本書紀』垂仁天皇の条に「天皇、田島間守に命（みことおほ）せて、常世国に

遣して、非時の香菓を求めしむ」とある)。

「常世」については、折口信夫の研究が知られている。折口によれば、常世は琉球では「にらいかない」といい伝えられてきた。折口は、「琉球宗教の浄土にらいかないが元、死の島であった」という。それはかって、死人や汚物を捨てた海上の島であった。「其恐しい島が」、のちに理想化されて、「浄土としての常世」と観念せられるようになったと説いている。[22]

ここで『梁塵秘抄』で、「塵」や「砂」や「さざれ石」が積って、「巌」や「山」になり、特殊には「蓬莱山」となるといわれていたことの意味が明らかとなる。「塵」・「砂」・「さざれ石」は、個々人の死後の霊魂をさす。それが集積されて「山」になるというのは、かって島に多くの死者を捨てたことを前提にして、はじめて理解できることである。

死者の放棄—それを美化して、死者の霊と蓬莱山との合体という考えが生れた。捨てられた死者は(その死に様をみても)現世においては、幸福な生活はえられなかったであろう。しかし、死後蓬莱山の下で(または霊魂が蓬莱山の上に積み重ねられることにより)、永生と幸福がえられるとする。

蓬莱山に住むという仙人(また須弥山に住むという鬼神—注21参照)は、島に捨てられた死者の霊の形象にほかならない。そして『梁塵秘抄』の歌および「君が代」の歌は、「千代に八千代に」という永世の願いを、死後の「常世」に托したものである。それは死者の霊に対する鎮魂の歌にほかならない。

これまで、「君が代」(ないし「我君は」)の歌について、次のことを述べてきた。

① この歌に近いのは、天智天皇臨終のさいの倭姫の歌である。「君が代」の歌の雰囲気は賀歌よりも挽歌に近い。

② 万葉集では、「巌」の語は、死と墓所を意味して使われている。

③ 「さゞれ石の巌となりて苔のむすまで」において、挽歌のテーマである死と再生(転生)が歌いこまれている。

④ 「我君は」の歌の本歌である「妹が名は」の歌は、水死した乙女のための鎮魂歌である。

⑤『梁塵秘抄』は「君が代」を「塵も積れば山となる」の諺と結びつけ、個々の霊魂が蓬莱山に積ると歌っている。すなわち死後の世界のできごととらえている。

これらは、「君が代」（および「我君は」）の歌が、本来挽歌であることを示している。

（貫之が「古今集」序において、秀歌を集めて『古今和歌集』を編纂したという歴史的事業をなしとげたことを自ら慶賀するのはよいとしても、「我君は」の一部（「さざれ石の巌となりて」）をとり出してその「よろこび」を語っているのは、この歌を自分の都合のよいようにつまみ食いしたという批判は免れえない。彼が「我君は」の歌を「賀歌」の部に含めたことは、この歌の基本的性格を見誤ったものといわざるをえない）。

「我君は」の歌は、先にあげたような特徴を考慮すれば、「賀歌」ではなく、「挽歌」ないし「哀傷歌」のうちに含められるべきであった。

三　その後の「君が代」をめぐる動き

薩摩藩主は江戸時代より琵琶歌「蓬莱山」を作り、その中に「君が代」を歌いこんでいた。そして代々おめでたい折に、これを演奏して歌った（「蓬莱山」と「君が代」との結びつきは偶然ないし一時的なものではなく、このように後世にまで及んでいる）。

明治三年（一八七〇）薩摩藩は「天皇に対し奉る礼曲」を定めることになり、砲兵隊長（のちの陸軍大臣）大山巌等に選曲を依頼した。大山は自分の名前「巌」がよみこまれている「君が代」を強く推したといわれる。そして藩軍楽隊長イギリス人フェントン（J. W. Fenton）に作曲させた後、海軍省、さらに宮内省に提出した。フェントンの曲が不評であったため、宮内省は雅楽課林広守に作曲させ、ドイツ人エッケルト（F. Eckert）に編曲させた（奥好義が東京女子師範学校

のために作曲した曲を林が横取りしたという説もある。佐藤仙一郎『日本国国歌正説』)。それは明治十三年宮中の天長節で最初に演奏された。

文部省は明治十四年『小学校唱歌集初編』に「君が代」を収めたが、それは次のような歌詞であった。

一、君が代は　ちよにやちよに
さざれいしの　巌となりて
こけのむすまで
うごきなく　常磐(ときは)かきはに
かぎりもあらじ

二、きみがよは　千尋の底の
さざれいしの　鵜のゐる磯と
あらはるゝまで
かぎりなき　みよの栄を
ほぎたてまつる

その後二六年に、文部省告示で「君が代」が「祝日大祭日歌詞並楽譜」に載せられ、学校の儀式でつねに用いられるようになった。

「君が代」は学校教育を通じて広まったといえる。しかしそれが国歌として定められたわけではなかった。明治十五年国歌制定の動きが起り、文部省の音楽取調掛で準備が進められたが、そのときは「君が代」とは別の、「尊王愛国」を歌った新しい歌詞が用意されていた。しかしそれを国民の間に広めるのは困難という批判が起って、作業は中止となった。その

後も国歌制定の論議が起るたびに、「君が代」も一つの有力な候補とはされたが、正式に決定するには至らなかった。

戦後、それも比較的最近になって、「君が代」を国歌として法制化する動きが起った。一九八五年二月二六日の閣議で、松永光文相は、三番まで歌詞のある「君が代」のあることが、文部省の調査でわかったと報告し、一時期話題となった。それは次のようなものである。

一、君が代は　千代に八千代に　さざれ石の
　巌となりて　苔の生すまで

二、君が代は　千尋の底の　さざれ石の
　鵜のゐる磯と　あらはるるまで

三、君が代は　限りもあらじ　長浜の
　真砂の数は　よみつくすとも

のち、三番までの歌詞のある「君が代」は、江戸時代以前に逆のぼり、古くから行われていたものであること、歌詞の二番は源頼政のよんだ和歌、三番は光孝天皇の大嘗祭に奉られた和歌であることがわかった。

そして平成十一年（一九九九）、「国旗及び国歌に関する法律」によって、「国歌は、君が代とする」（第三条）と定められた。（「君が代」国歌化の動きと関連して書くべきことは多いが、紙数が尽きてしまった）。

最後に一言つけ加えておきたい。

先に述べたように、「我君は」の歌は本来挽歌である。もしそれが「哀傷歌」のうちに含まれていれば、明治初年薩摩の人たちは、「君が代」を明治政府にすすめることはしなかったであろう。近年「君が代」を国歌として法制化する運動をした人たちは、それが挽歌の系列に属することを知っていたのだろうか。

いかに貫之にはじまる誤った伝統によるとはいえ、祝賀の儀式で一斉に挽歌を歌う国民は、祝宴の会場で弔辞を読む客と同じく、悲喜劇といわなければならないであろう。

そのことを考えるとき、本論で投じた一石はけっして小さいものではないはずである。

〔注〕

(1) 藤田友治「『君が代』の源流」、『「君が代」、うずまく源流』所収、一九九一、新泉社。
(2) 山田孝雄『君が代の歴史』一九五六、宝文社。
(3) 金子元臣『古今和歌集通解』一九三四、明治書院。
(4) 窪田空穂『古今和歌集評釈』一九六〇、東京堂出版。
(5) 松田武夫『新釈古今和歌集』一九六八、風間書房。
(6) 小島憲之・新井栄蔵校注『新日本古典文学大系5　古今和歌集』一九八九、岩波書店。
(7)(8) 竹岡正夫『古今和歌集全註釈　古注七程集成』一九七六、古文書院。
(9) 小西甚一校註『梁塵秘抄』一九五三、朝日新聞社。
(10) 阿部吉雄『新釈漢文大系七　老子・荘子上』明治書院。
(11) 遠藤哲夫『新釈漢文大系八　荘子下』明治書院。
(12) 劉向『説苑』尾張書肆（東洋文庫蔵）。
(13) 『大正新脩大蔵経第二五巻　釈経論上』所収「大智度論」、一九二六、大蔵出版。
(14) 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経上』岩波書店。
(15) 小島憲之校注『新編日本古典文学全集　萬葉集四』小学館。
(16) 秋本吉郎校注『日本古典文学大系二　風土記』岩波書店。
(17) 京都大学文学部編『和名類聚抄』臨川書店。
(18) 「琉球の宗教」、『折口信夫全集』第二巻、中央公論社。

(19) 平敷令治『沖縄の祭祀と信仰』一九九〇、第一書房。

(20) 劉向『列仙伝』の「安期先生」の項に「(安期先生) 書を留め曰く、『後数年、我を蓬萊山に求めよ』と。始皇即ち徐市、盧生等数百人を遣わして海に入らしむるも、未だ蓬萊山に至らざるに輒ち風波に逢ひて還る」とある(前野直彬編『山海経・列仙伝』一九七五、小学館)。

(21) 「須弥山」の考えが日本に伝来したのは、七世紀初であり、『日本書紀』の推古二十年(六一一)に、百済の帰化人芝耆麻呂が、御所の南庭に須弥山を築いたと記されている。

須弥山については、『長阿含経』第十八巻仏説信佛功徳経の「閻浮堤洲品」に、次のように記されている。

「仏は比丘に告ぐ。…須弥山王は海水中に入ること八万四千由旬なり。海水上に出づること高さ八万四千由旬なり。…須弥山王に七宝の階道有り。…

仏は比丘に告ぐ。其の下階道に鬼神有りて住む。名づけて伽楼羅足と曰ふ。其の中階道に鬼神有りて住む。名づけて持鬘と曰ふ。其の上階道に鬼神有りて住む。名づけて喜楽と曰ふ。…須弥山頂に三十三天宮有り。宝城七重、欄楯七重、羅網七重、行樹七重あり。乃至無数の衆鳥相い和して鳴くこと又た復た是の如し」(『新国訳大蔵経　長阿含経Ⅲ』、金子芳夫校註、一九九五、大蔵出版)。

(22) 「古代生活の研究—常世の国」、『折口信夫全集』第二巻。